

<連載> ノルウェーだより no.1

## 未来の「モノ」の記憶

吉澤 剛 (オスロ都市大学労働研究所)

それまでノルウェーについては、サーモンとオーロラぐらいのイメージしか持っていませんでした。建物や木々の輪郭が目刺さる今夏に初めて訪れてから、もう半年近くが経ちます。曖昧な薄暗い天気が続く季節に移り、たまに地平線の彼方に望む茜雲がやけに愛おしく、それさえも気づけば瑠璃色の幻影となって消えていきます。この地に住むということにほとんど先入観がなかったぶん、新鮮な発見というか戸惑いも多い日々が続いています。

四方山に終わらないよう、この国を代表する学者から話を始めてみます。ノーベル賞受賞者はこれまでに11人で、戦前に文学賞・平和賞が5人。戦後は経済学賞3人、化学賞が1人、そして最近の2014年に生理学・医学賞で2人が受けています。もちろんノーベル賞がすべてではありません。むしろ、関わりのない学者のほうが知られているでしょう。まず、群論など数々の数学用語に名を残したニールス・アーベルが最も有名ではないでしょうか。また、合理的選択理論を幅広い分野に応用したヤン・エルスターや、平和学で知られるヨハン・ガルトゥングなどもあります。ここでは、功績になじみのあるアルネ・ネスとクリステン・ニゴールという二人の学者を紹介しながら、いろいろと考えてみたいと思います。



オスロ中心部のクリスマスマーケットにある無料のスケートリンク

哲学者アルネ・ネスが1973年にディープエコロジーを提唱した当時のオスロ大学は、ガルトゥングや『成長の限界』の共著者ヨルゲン・ランダース、やがて国連の特別委員会で「持続可能な開発」の概念を打ち出し、世界保健機関事務局長やノルウェー首相を歴任していくグロ・ハーレム・ブルントラントなど、後の哲学や政治に大きな影響を及ぼすエコロジストが集まっていました。なかでもディープエコロジーは、人間の利益を優先した環境活動を脱し、生命体どうしが複雑に相互作用している環境全体が等しく尊重され、権利を有するという立場です。こうしたロマン主義的な近代文明批判を底流としつつ、経済や政治の現場で実践的な折り合いを探る合理性を持ち合わせているのは、自分の主張ばかりを通すのではなく、組織としての合意形成プロセスを重んじるノルウェー人らしい特徴かもしれません。ただ、ディープエコロジーは、人間以外の生物が持っている利益関心や価値観を擬人化し、それを人間自身が代弁しているという点で、必ずしも人間中心的な観念を克服できていないようです。

これを感じさせるできごとが身近にもありました。春から秋にかけて、オスロ郊外の丘陵や湖畔は多くのハイカーで賑わいます。夜が長い冬の鬱屈を晴らすかのように、誰もが無心

にひたすら歩いたり走ったり。いったいこの人たちはせっかくの自然を楽しんでいるのだろうかと思うくらいです。「森林浴」という日本語がスピリチュアルな実践講座として真面目に開かれるくらい、何もせずに自然の中にたたずみ、安らぎを得るということが難しい。自然と対峙し、運動することで人間性を回復するというのは、どうもディープになりきれていない証拠ではないでしょうか。

もう一人、クリステン・ニゴールを取り上げましょう。計算機科学者で、1960年代にオーレヨハン・ダールとともに Simula を開発しました。これは後の Smalltalk や、現在でも人気の C++ や Java のルーツとなる「オブジェクト指向」という概念を持ったプログラミング言語です。オブジェクト指向では、扱う対象や環境の変化とともにプログラムが柔軟に変更できるよう、交換可能な部品を用いたり、ある程度まとまった機能を一つの役割にまとめてカプセル化したりできます。タイヤやハンドルばかりでなく、それらが全体で動くものを車と呼ぶように、プログラムの中で「モノ」が扱えると言えばよいでしょうか。

一般的に、他の人が書いたプログラムは読みにくいといいます。註釈をつけたとしても全体の設計思想というのはプログラムから伝わりにくいものです。モノとしていくつかのまとまりやその関係性が見えれば、チームでプログラムを開発するときなど、自分が中身を知って変えるべきモノや、そうでないモノがわかりやすい。ニゴールにとってオブジェクト指向はプログラミングではなく、モデル化であり、理解することでした。1970年代に彼が労働組合と連携してプロジェクトを進めたのもこの延長にあります。コンピューターなどの情報通信機器の目覚ましい発展を前に、労働者が使える知識基盤の構築が必要でした。情報やプログラム、労働環境は教育やチームワークによって改善し、逆にそれらを通じて労働者も良く変わっていく。ニゴールは人を含めた情報システムのあり方を考え続けた思想家であり、実践家でした。

ニゴールの尽力もあって現在のノルウェーはすっかり電子化・キャッシュレス化が進み、行政手続きから銀行、郵便、医療、図書館にいたるまで、すべて個人のIDや携帯番号と紐づけられています。相手の携帯番号がわかれば、アプリ一つで先方の銀行口座にただちにお金を振り込むことさえできます。これを指して、日本はシステム化が遅れている、公共機関への信用が低いなどと言われますが、根底にあるのは「モノ」に対する信頼感の違いかもしれません。現金主義と冷笑されても、いざというときに活躍するのはデジタル化された情報ではなく、リアルな「物」です。天災など、この世の移ろいやすさを実感してきただけに、

日本人は触知できる物を大切にしてきたように思います。対して、ノルウェーで言う「モノ」はオブジェクト、つまり主体とは異なる「対象」にすぎません。だからクレジットカード端末機や公共機関ウェブサイトは単なるブラックボックスとして対象化できる。日本人はどうもその後ろで動いている機械や人、組織の影が「物」として見えてしまい、最後は手で確かめられる安心感や信頼性にすがってしまう。逆に、日本人は感じる事ができればヒトだろうがヒトでなからうが、「物」として等しく扱えるのかもしれませんが。そういえば、石ころや木々を崇めた昔から、ロボットやフィギュアに替わった今でも、やおろずの物神が巷間にあふれています。

ネスもニゴールも、ヒトとヒト以外の自然や人工物との新たな関係性を模索しながら、ヒューマニストとしてあらゆる対象に人間的理性を求めていたように見えます。先日、こんなことがありました。ノルウェーの小学校で、クラスごとに行うクリスマス会でのこと。保護者は一つプレゼントを用意し、会に無償で提供します。生徒の保護者や家族も参加するこの会では、プレゼント抽選券が少額で交換され、集まったお金は担任の先生たちへのプレゼントとして活用されます。親がたくさん抽選券を買えば、当然、その生徒にプレゼントが当たる機会が多くなります。案にたがわず、抽選の風景は悲喜こもごもでした。いくつものプレゼントを当てて満面の笑みを湛える生徒がいる一方、何も当たらず泣き叫ぶ子供たち。幸運な子供からのおすそわけという心温まる場面も見られましたが、低学年の児童に善意や自制といった理性的な振る舞いを求めるのは、少々残酷な仕掛けに見えました。この抽選方式は、金銭の多寡が影響することもあって、必ずしも機会均等とは言えません。日本では結果平等という悪しき風習が非難されているとはいえ、子供のお祭りごとには容認されてしかるべきでしょう。個々の事象だけを見れば非はないのかもしれませんが。ただ、全体の雰囲気はどうなるかを考えて動く「空気を読む」力が少し恋しくなります。子供や大人、プレゼントや抽選券、お金といった絡み合いによって形成される世界は、日本人にはおそらくそれ全体が触知可能なモノです。なので、自分がプレゼントをもらえるかどうかにかかわらず、会の雰囲気が残念だと、自分まで残念な気持ちになってしまいます。

ここでは dagnad と呼ばれる共同体のボランティア活動が盛んです。同調圧力を受けることもなく、やりたい人がやりたいように参加できるのが特長ですが、ふと、誰が地域やこの社会のことを考えていくのだろうという気もします。そこは小国、議員や行政が小回り良く動いているのかもしれませんが。ノルウェーでの市民科学活動がほとんど見つからず、最初に

ぶつかったのがこの壁です。あらゆる活動がすぐに政治化しやすいため、逆に、政治的でない草の根活動が育ちにくいようです。また、科学的にも政治的にも、長期的な課題をどう考えるのか、その舞台として適切な場がなさそうです。2016年、グリーンピースなどの環境団体や市民がノルウェー政府を相手取り、北極圏における新たな石油採掘は、同国憲法が保障する安全な環境を享受する権利を侵害していると訴えました。最終的に石油採掘権を無効にするという訴えは退けられたものの、原告の主張は一部認められ、いずれ再燃しそうな火種が残りました。ノルウェーは1960年代に北海油田が開発されてから裕福な資源国へと転身しました。フィヨルドなどの自然が豊かで、水力で自給するエコロジーな国という印象の一方、政府収入全体の1/4にも及ぶ石油ガス産業への依存からの脱却は容易ではありません。エコロジーとエコノミー。それはそれ、これはこれ。それぞれは極めて合理的に進行している取り組みなのかもしれませんが、この国全体の未来を対象化して考える時期に来ているのではないのでしょうか。多額の税金で社会保障を充実させたまま、増え続ける移民を包摂する社会の将来をどう描くのか。大戦の戦禍を免れた国民はそれほど負の記憶を背負っていないだけ、将来の痛みをどう直視していくかについての覚悟が問われている気がします。日本の社会には危機感しかありませんが、その感覚がない国が本当に豊かで幸せなのかということは、おそらく分けて考えなければならないでしょう。



オスロ・フィヨルドに面したアストルップ・ファーニリ現代美術館

2014年、オスロ郊外の森に「未来の図書館」ができました。毎年、世界中から一人の著名な作家が選ばれ、新たに一冊の本を執筆、寄贈します。その本はオスロの国立図書館に保管され、百作品が収められる2114年にはじめて公開されます。森に植えられた千本の苗木は、三千冊の本を印刷するのに使われるということです。作家は百年後の読者に向けて書き、計画は百年続く。計画を主導したアンネ・ベアテ・ホヴィンドは、ヴァイキング時代から続く農家で育ったものの、家督を継ぎませんでした。しかし、そこで木を植えるということについて学び、この計画の着想にいたったそうです。人と自然との連綿たる営みが、本という「物」に回帰した形で未来へと継承される。理解するだけの対象だった過去も未来も、物に残された記憶として、人や自然に伝えられていきます。百年後、どのような結末をたどるにしても、そこに向けられる想像力がきっとこの世界のあり方を変えていくのだと思います。願わくば、それが多くのモノにとって良いものとなりますように。